都留文科大学研究紀要　第96集（2022年10月）
The Tsuru University Review, No.96（October, 2022）

ジャムヤン・ノルブ『シャーロック・ホームズの失われた冒険』におけるラドヤード・キプリング『キム』の影

Jamyang Norbu's *The Mandala of Sherlock Holmes* as a Pastiche of Rudyard Kipling's *Kim*

小　室　龍之介

KOMURO Ryunosuke

抄録：

本稿は、アングロ・インディアン作家ラドヤード・キプリングの代表的小説『キム』のパスティーシュとして知られ、チベットの人権活動家であり作家でもあるジャムヤン・ノルブの小説『シャーロック・ホームズの失われた冒険』が、キプリングやコナン・ドイルのテクストを重層的に、しかも巧みに取り込むことで、20世紀（とりわけ1950年）以降、中国共産党がチベットに対して政治的圧力を強くかけ続けることに向けられた批判的テクストであることを焦点化し議論することを目的とする。そのために、ノルブ、キプリング、ドイルの各テクストにおいて露呈される近現代における国家間の政治的関係や対立を、チベット近現代史に照らし合わせながら綿密に分析、検討していく。この手順を通して、ノルブやキプリング、およびドイルのテクストについてこれまで検討が加えられることのなかった側面を炙り出したい。

キーワード：ジャムヤン・ノルブ、ラドヤード・キプリング、コナン・ドイル、チベット、中国、パスティーシュ

１．はじめに[1]

近年、中国共産党による新疆ウイグル自治区住人に対する強制不妊手術や強制労働といった人権問題が日本のメディアでもクローズアップされるようになったのは、日本における人権意識の高まりと連動しているように思えなくもないが、その新疆ウイグル自治区と接するチベットにおける中国共産党による圧政についてはなかなかそうなってはいない。近年の事例のみに絞れば、中国共産党が「解放」なる大義のもとにチベットを支配下に置いたのが1951年、1959年３月にはチベット動乱が発生し、ダライ・ラマ14世は隣国インドへの亡命を余儀なくされた。それ以降、チベットの首都ラサに駐留する中国共産党が毎年３月ともなると厳戒態勢を敷くのは、その時期になると、中国共産党の圧政に対する抗議の意思表明として焼身自殺に及ぶチベット人が後を絶たないからであり、本論考に取り組

んでいる間にもチベットの男性アイドル歌手が焼身自殺に及んでしまい、158人目の焼身自殺者がでてしまった。[2]

このような中国共産党の暴挙についての告発行為を行なっている一人として、ジャムヤン・ノルブ（Jamyang Norbu, 1949- ）を挙げることができる。ノルブはチベットの裕福な商人の家に生まれた作家であり人権活動家として知られている。40年以上の亡命生活をインドで過ごしたのち、活動拠点をアメリカに移し現在に至っている。父親の命令でイギリス領インドのダージリンにあるイエズス会系の学校に送りこまれ、ノルブは英文学への素養をそこで培っていった。また、ダーラムサラで研究機関を立ち上げるなど、多方面で精力的な活動を見せている。彼の使用言語は英語で、数多くのエッセーをブログや新聞などで発表しており、そのほぼ全てはチベットを実効支配する中国に対する非難と言って良い。

ノルブ自身の日本における知名度は決して高いとは言えないが、彼のテクストのいくつかは日本語訳として出版されている。そこには、日本の「保守層」にノルブが利用されている感が否めないではないものの、例えば、日本語訳された代表的ノンフィクション作品『中国とたたかったチベット』（*Horseman in the Snow*, 1986）が描くのは、中国の「解放」という名の政治的抑圧に対してゲリラ戦で抗うチベット人である。ノルブによる他のエッセーやノンフィクション作品、『シャドウ・チベット』（*Shadow Tibet*, 2004）、『ドラゴンの歯を買う』（*Buying the Dragon's Teeth*, 2004）などにも中国共産党批判が一貫して流れている。そんな中、ノルブの『シャーロック・ホームズの失われた冒険』（*The Mandala of Sherlock Holmes*, 1999）は、虚構と現実を織り交ぜてある点で、これまでのノルブの出版物から大きく転換したテクストである。[3]　このテクストはこれまで同様の中国共産党批判を展開しつつ、そのテーマや枠組みは、他の複数の文学テクストにあるテーマや枠組みを換骨奪胎したパスティーシュ作品になっている点にそのユニークさが認められる。その文学テクストの作者とは、ノルブが愛してやまないと公言するアーサー・コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle, 1859-1930）とラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling, 1865-1936）のことである。[4]

ノルブは『マンダラ』において、ノルブはコナン・ドイル作品からは登場人物名を借用したり推理小説のギミックを借用したりしつつ、特に『シャーロック・ホームズの思い出』（*The Memoirs of Sherlock Holmes*, 1894）所収の「最後の事件」（"The Final Problem", 1893）と『シャーロック・ホームズの帰還』（*The Return of Sherlock Holmes*, 1905）所収の「空き家の冒険」（"The Empty House", 1903）に参照することによって『マンダラ』の登場人物や時代設定を構築するだけでなく、キプリングの『キム』（Kim, 1901）からは、登場人物名の借用はもとより、チベットと中国の激化する対立およびゲリラ戦術を繰り広げるための枠組みを借用している。すなわち、『マンダラ』は、両作家によるテクストの設定や登場人物、および主要テーマがジグソー・パズルのように巧みに嵌め込まれたテクストであると言える。これらの技巧に加えて『マンダラ』がこの上なく秀逸なのは、ノルブが参照するテクストのすべてが、19世紀末から20世紀前半のインドはもとよりチベットと関連していることにある。

本稿は、アングロ・インディアン作家ラドヤード・キプリングの代表的小説『キム』のパスティーシュとして知られ、チベットの人権活動家であり作家でもあるジャムヤン・ノ

ルブの小説『シャーロック・ホームズの失われた冒険』（以下、『マンダラ』）が、キプリングやコナン・ドイルのテクストを重層的に、しかも巧みに取り込みことで、20世紀（とりわけ1950年）以降、中国共産党がチベットに対して政治的圧力を強くかけ続けることに向けられた批判的テクストであることを焦点化し議論することを目的とする。[5] そのために、ノルブ、キプリング、ドイルの各テクストにおいて露呈される近現代における国家間の政治的関係や対立を、チベット近現代史に照らし合わせながら綿密に分析、検討していく。この手順を通して、ノルブやキプリング、およびドイルのテクストについてこれまで検討が加えられることのなかった側面を炙り出したい。

2．キプリングの『キム』とロシアを警戒するイギリス

『キム』はインドの都市ラホールからはじまる。アイルランド人の両親にもとに生まれた少年キムは、馬商人マーブブ・アリと常日頃つるんでいる。現地語を操るキムが地元の博物館前に設置された大砲にまたがるなどして遊んでいるところに、チベットからやってきたテシュー・ラマという老僧が姿を表す。この老僧は矢の川を、その所在も不明なまま、求める旅に出ようとするところであった。キムはこの僧の弟子（チェラ）だと自認し、ラマ僧の同伴をすることになった。徒歩や列車でインドのベナレスへ向かう最中、２人が遭遇したのは、インドに駐留中のイギリス軍の連隊を率いるクレイトン大佐とそこに随行する２人（しかもイエズス会系と英国国教会系）の聖職者であった。キムの父親もそうであったようにクレイトン大佐もフリーメイソンの軍人であるため、自然のなりゆきのように思えるキムとクレイトン大佐とが急接近する瞬間は、南下政策を推し進めるロシアに対抗するためのイギリスの軍事政策の一環として知られる「グレイト・ゲーム」にキムが巻き込まれることを意味している。それ以降、キムはイギリスの連隊長によってラマ僧から引き離され、イエズス会系の学校に送りこまれることになる。これには、彼に英語を習得させることと、土地測量などのスパイにとって必要な技術をキムに習得させるというクレイトンの意図が働いてのことだ。その教育から解放されると、キムはラマ僧と合流し、矢の川探しを再開しつつ、ハーバート・スペンサーを敬愛しイギリス的価値観を内面化したハリー・チャンダー・ムーケルジーによって率いられ、また、宝石商ラーガン・サーブによってスパイへと仕立てあげられていく。結末近くにおいて、キムは、その機密文書を狙うロシア２人（とはされるが実際はうち１人はフランス人）のスパイとニアミスをするも振り切ることができ、ハリーに機密文書を無事に手渡しスパイとしての使命を果たす。また、ラマ僧も突如足元から湧く水に解脱に到達するところで『キム』は結末を迎える。

『キム』は設定年を明らかにしていない。キプリングは1897年には『キム』の構想および執筆に取り組んでいることから、また、背景となっている「グレイト・ゲーム」への参照から、1890年代と考えて妥当であろう。

3．ノルブの『マンダラ』と中国に対抗するチベット

『マンダラ』は、ノルブ自身による「序」、主要登場人物で、全編において一人称語り手であるハリーについての詳細な説明が施された「イントロダクション」、第１章「インディ

ア」、第２章「チベット」、第３章「そしてその向こう側」、エピローグ、ユングについての補足によって構成される。

第１章では、ベンガル出身のハリーと税関職員ストリックランドが、ボンベイの船着場に降り立つ「不可解なノルウェー人」とされる探検家シガーソンを出迎える。このシガーソンという名前は変名にすぎず、この人物の本名はホームズであることが開始まもなく明かされる。ホームズはハリー・チャンダー・ムーケルジーを自分たちの一味に加えた方がよいと判断しハリーとホームズの冒険譚が始まるのであるが、このあたりから数件の殺人事件とその解決にむけたホームズの推理がテクストを引っ張っていく。

その一例として、ヒルがトリックとして使われた殺人事件に触れてみよう（24-25）。夥しい出血はあるものの、外傷が一切ない死体を目にしたホームズは、ヒルがそのトリックとして使用されたと推測する。ハリーが常日頃通うボンベイの自然科学史協会へ案内されると、ヒルについての調査を開始し、殺人事件で使用されたヒルがヒマラヤ山脈に生息する巨大な赤ヒルであるとの結論に至る（55）。加えて、この殺人事件の本来のターゲットはホームズ自身であることをも悟ると、チベット行きを決心し、アンバラ、シムラといった『キム』でもよく登場する地を経由してラサへ向かう。このラサ行きも、（インド調査省に勤務し、英語、ヒンドゥスターニ語、ペルシャ語、アラビア語、中国語、フランス語、ロシア語を駆使する）ラーガンやクレイトン大佐からの協力を得ながら進められていく。

第２章では、ボンベイに到着したホームズを常時追跡していたアスターマンがホームズに接近すると、入手困難なチベットへの入境許可書がホームズにはいとも簡単に発行されたのは、それがラマの主任秘書（128）の命令によるものだったこと、そしてその命令に背後には、中国の圧政に対抗するための援助をホームズから受けたいと望むチベット側の期待があったからだということがホームズに示される。かくして1892年５月17日にラサに到着したホームズら一行はダライ・ラマの夏の自宅であるノルブリンカ（宝石の庭）に案内される。ここ（16節）でもチベットを征圧しようとする中国側の企み、とりわけ中国によるダライ・ラマ殺害計画について詳細に、強い危機感とともに語られる。その危機感の強さは、新ダライ・ラマが即位するタイミングが今まさにその時であることに加え、過去３代のダライ・ラマが不審な死を遂げていることに起因する（155-56）。チベットはある預言者の予言をもとにホームズへの支援要請を出す（157）。が、その支援要請に応えられないとするホームズの態度が示されると、チベット側は落胆を禁じ得ないのだが、次の第３章「そしてその向こう側へ」の冒頭において、侵入者による襲撃事件がノルブリンカで発生し、ホームズも中国を相手とするチベットの戦いに巻き込まれることになる。

第３章ではホームズやハリーを中心としたチベット側と中国共産党側との戦闘が繰り広げられ、最後はチベット側が勝利を収める。ダライ・ラマの住むノルブリンカを襲撃した侵入者（The Dark One）の目的は、ダライ・ラマの命ではなくマンダラの巻物だった。さらに、ラサのオカルト養成施設（179-80, 210）でかつてその技術を修得しておきながら後に中国に寝返ったこの侵入者は、モリアーティだと判明する。ただ、マンダラの巻物よりもさらに重要なのは、ラサのノルブリンカから100マイルほど北に位置するシャンバラのアイステンプルとそこに収められている円盤状のパワーストーンだったことがわかる（220）。アイステンプルは普段は厚い氷河に埋もれ入口もそのために封じられてしまっているが、チベットの神々が新たなグランドラマの戴冠するタイミングだと判断した時にの

みその厚い氷壁の門が開く仕掛けとなっており、アイステンプルは極めて重要な地とされている。そして、パワーストーンはチベットの正統性を示すがゆえに、ホームズとモリアーティによるパワーストンの争奪戦が、推理小説の要素とファンタジーの要素を織り込ませつつ展開され、最後はホームズが、すなわちチベット側がこの戦いを制する。

４．中国、イギリスを中心としたチベット外交史

キプリングの『キム』においてはイギリスとチベットとの政治的および外交的関係が、ノルブの『マンダラ』では中国とチベットとのそれが少なからず両テクストのテーマに関わっていることが自明である以上、基礎的なチベット近現代史について確認することが求められよう。[6]

清王朝（1644-1911）にとっての18世紀とは、チベット支配への動きを強化した時期であった。1720年、清王朝軍はチベットに侵攻し首都のラサを支配下に置いた。清王朝の口実は、チベットのラマ僧たちがモンゴルに宗教的に介入することで被りかねない損益を防ぐためであり、チベットを清王朝に併合する意図はなかったとみられている。その後、チベットの内戦が勃発するなど清王朝とチベットとの関係は良好とはいえなかった。1728年、清王朝はチベットとの国境付近の地域を併合し、四川省や雲南省の管轄区域となった。その後の数十年間、この状態が続くものの、チベットとの関係をこじらせたネパールが1788年にチベット侵攻をすると、チベット単独の軍事力ではネパールを駆逐できないと判断した清王朝は、1792年、この機に乗じてチベット政府を再組織化した。

だが、19世紀に突入すると、清王朝は太平天国の乱（1848-64年）を例とする国内動乱やアヘン戦争（1839-1842年）を例とする西洋諸国との抗争に忙殺されるにつれてチベット支配の余力を失うこととなった。それにより、1840-50年代のチベットは、清王朝を抜きにしてもネパールなどとの戦いに応じられるほどの強国化を果たすことができ、1877年にはダライ・ラマ13世が清王朝からの介入なしに選ばれた。

19世紀後半のチベットは、清王朝の弱体化を好機と見たイギリスからの介入および攻撃を受けることになった。インドとチベットの交易の発達を目論んだイギリスは、1861年にはラサへ使節団を派遣することの認可を下しており、1886年には使節団を派遣していた。これに対しチベットは抵抗を示したが、それがむしろイギリス軍による攻撃を誘発してしまった。イギリスのカーゾン卿が1899年にインド総督に就任すると、ラサとの関係強化を望む彼はダライ・ラマ13世宛てに書簡を送るも、書簡は未開封のままカーゾンの元に戻された。1904年８月３日、これを口実としたイギリス軍はヤングハズバンドを先頭に据えラサ侵攻に乗り出し、ダライ・ラマ13世はモンゴルへの亡命を余儀なくされる。イギリスのこういった軍事行動の目的は、チベットとの関係強化と交易の発展以外のもっと重要な目的があった。それは、ロシアの南下政策を食い止めることである。すなわち、チベットをロシアと英領インドの緩衝地帯とすることをイギリスは狙っていたのである。

こういったイギリスによるチベット侵攻は南下政策を推し進めるロシア封じの意味合いを持っていたと同時に、チベットに対する中国の影響力を排除する意味合いをも持っていた。しかし、1906年に取り交わされた英中間協約は中国がチベット支配に乗り出す口実

を与えることとなり、それ以降、中国はチベット支配への野望を剥き出しにする。1909年12月に、中国軍がラサに進軍しているとの報を受け、ダライ・ラマ13世はイギリスに援助を求める書簡を送るも徒労に終わり、ダライ・ラマ13世は２度目の亡命生活をインドで送ることとなった。ここで注目したいのは、イギリスの対チベット政策である。イギリスは中国の動向を非常に警戒していたわりには、チベットがいざ中国によって侵攻を受けても軍事的支援を一切行わなかっただけでなく、チベットの独立をも承認しなかった。第２次世界大戦後に中国共産党が誕生し、1949年に毛沢東によって建国された中華人民共和国が「解放」という名のラサ侵攻を1951年に実行に移した際にも、イギリスは同様の態度を貫いた。中国共産党によるチベット支配に対する抵抗として1959年３月のラサ蜂起は広く知られていると思われるが、先述したようなチベットでの焼身自殺が３月に発生するのは、ラサ蜂起が持つ政治的重みを伝えるものである。ダライ・ラマ14世はインドのダラムサラで臨時政府を樹立、現在でも亡命生活を続けている。

５．『マンダラ』と先行テクストとの関係

ノルブの『マンダラ』と、キプリングの『キム』やコナン・ドイルの短編「最後の事件」と「空き家の冒険」といったテクストとの関係は、登場人物名、設定年、そして各種の対立を洗い出せば、『マンダラ』は先行テクストの変奏と言える。『マンダラ』に登場するシャーロック・ホームズ（シガーソン）、モリアーティ、ハリー・チャンダー・ムーケルジー、ラーガン・サーブやクレイトン大佐を一例とする登場人物名は、これらのテクストからの借用であることは自明である。また、本論で参照するどのテクストも1890年代後半をその設定として想定されていることも指摘できる。『キム』の設定年については前述したとおり1897年前後としてよかろう。他方、ドイルの「最後の事件」において、ホームズとモリアーティがライヘンバッハの滝で1891年５月４日に対決により二人は消息不明となり、その続編となる「空き家の冒険」において、ホームズは1894年４月５日に見事な帰還を果たすだけでなく、消息不明期間（３年間）のうちの２年間、彼はチベットに渡り、その報告を英国外務省にも行ったことをワトソンに知らせる。

> I travelled for two years in Tibet, therefore, and amused myself by visiting Lhassa and spending some days with the head Llama. You may have read of the remarkable explorations of a Norwegian named Sigerson, but I am sure that it never occurred to you that you were receiving news of your friend. I then passed through Persia, looked in at Mecca, and paid a short but interesting visit to the Khalifa at Khartoum, the results of which I have communicated to the Foreign Office. (“The Adventure of the Empty House” 855)

ホームズは失踪から帰還までに要した３年間のうちの２年をチベットで過ごした――ノルブはこれを『マンダラ』において巧みに利用する。実際、『マンダラ』の第１章第15節でホームズがラサに到着するのは1892年５月17日と記されていることから、すべての整合性はつく。そして、『マンダラ』の第３章において展開されるホームズとモリアーティ

の対決はファンタジー的要素が加えられながら、チベット対中国共産党という現実世界の政治的かつ軍事的衝突に転用されている。さらに『マンダラ』が『キム』のパスティーシュとされている点を鑑みれば、チベット対中国共産党という対立は『キム』における「グレイト・ゲーム」を引き継ぎでもあることは自明だろう。つまり、コナン・ドイルによる2つの短編テクストで描かれるホームズとモリアーティの対立とキプリングによる『キム』で描かれるイギリスとロシアによる「グレイト・ゲーム」が、『マンダラ』のなかで掛け合わされ変奏されているのだ。以下、その変奏について考察したい。

第一に、ノルブが描写する悪名高きモリアーティは、コナン・ドイルによるテクストからの剽窃で成り立っている。ドイルの「最後の事件」で展開されるホームズとモリアーティの対立が『マンダラ』の第1章の第3節をすべて割いて明示されており、その中で、モリアーティは立派な家系に生まれた学識高い大学人であり類い稀な高みに達した数学的才能の持ち主で、どんな科学人も太刀打ちできない科学書を若くして著したにもかかわらず、彼には並々ならぬ「メンタル・パワー」によって悪化の一途をたどる犯罪者の血筋が流れており、大学町ではモリアーティの黒い噂がたちこめると、最後は大学でのポジションを捨てざるを得なくなった、とされている。

> '... In fact he was a man of most respectable origins. From a very tender age he displayed a precocious mathematical faculty which an excellent education developed to phenomenal heights. At the age of twenty-one, he wrote a thesis on the Binominal Theorem, which has had a European vogue. On the strength of it he won the Mathematical Chair at one of our smaller universities. ... Unfortunately a criminal strain ran in his blood which was exacerbated and rendered infinitely more dangerous by his extraordinary mental powers. Dark rumours gathered round him in the university town, and eventually he was compelled to resign his chair and to come down to London. (*The Mandala of Sherlock Holmes* 31)

これらの記述は、以下に示す「最後の事件」からの一節とほぼそのままと判断して良い。

> At the age of twenty-one he wrote a treatise upon the Binominal Theorem, which has had a European vogue. On the strength of it, he won the Mathematical Chair at one of our smaller universities, and had, to all appearance, a most brilliant career before him. But the man had hereditary tendencies of the most diabolical kind. A criminal strain ran in his blood, which, instead of being modified, was increased and rendered infinitely more dangerous by his extraordinary mental powers. Dark rumours gathered round him in the university town, and eventually he was compelled to resign his chair and to come down to London, where he set up as an army coach. ("The Adventure of the Final Problem" 832)

さらに、ライヘンバッハの滝で対決の末、ホームズはモリアーティの死を確認したこと、彼には共犯者が3人いることに加え、ホームズ自身はロンドンにいる知人経由でクレイト

ン大佐への救助要請を出したことを語っており、「最後の事件」における両登場人物の対決に『キム』の登場人物を織り込むことによるドイルとキプリング両作家テクストの変奏がここに見てとれる。

第二に、チベットと中国による対立の史実がテクストという虚構に組み込まれていることが挙げられる。『マンダラ』第１章において、中国がチベットにとっての脅威であることをホームズは同行するハリーから以下のように聞かされる。

> ‘Well, Mr Holmes, you may have heard of Thibet referred to as “The Forbidden Land” – and that is exactly what it is to all foreigners, especially Europeans. ... The situation has taken a turn for the worse recently, since the Dalai Lama, the Supreme Pontiff of the Thibetan church and the ruler of the country, is now in his minority, and the power of the Imperial Manchu representative in Lhassa has gained ascendancy.’
>
> ‘What do the Manchus have to do with Thibet?’
>
> ‘Since the army of the Emperor Yung-Cheng entered Thibet at the beginning of the last century, the Manchu throne has claimed certain suzerain rights in Thibet, and has established two Manchu representatives called Ambans in Lhassa, the capital city. ... At the moment, unfortunately, not only has the senior Manchu Amban in Lhasa, Count O-erh-t’ai, gained an ascendancy over the Dalai Lama and the Thibetan Government, but he also has an intense and virulent hatred for all Europeans, especially the English.’ (92)

ここでは、ラサに駐留する中国の特使高官が「外国人、とりわけヨーロッパ人にとって『禁断の地』である」チベットの君主ダライ・ラマを追いやり、中国がチベットの宗主権を握ってしまったことだけでなく、中国側の特使高官が「強烈で敵意に満ちた憎しみをヨーロッパ人、とくにイギリス人に対して抱いている」という内容がハリーからホームズに報告されているのが確認できる。これに続くチベット側のスパイ K.21を情報源とするホームズへの報告においても、チベットの大臣クラスの高官２名が内閣から追放された背後には、ラマを失墜させ自国の影響力を増大させるための中国側の陰謀であることが明白である以上、チベット側の高官や僧院長らは、未成年のために政治的実権を握れていないダライ・ラマに実権を握らせることを願っているということが記されている（104）。

第三に、ホームズとモリアーティによる対決には、オカルト的な特殊能力を駆使することで可能となるファンタジー的要素が盛り込まれていることが指摘できる。両者によるオカルト的な一戦を交える一幕を示してみよう。

> Though at death’s door, I [Hurree] nearly cheered at this revival of Sherlock Holmes’s strength. Indeed, his sharp eyes flashed like gemstones and all the outstanding aspects of his physiognomy ...
>
> ‘Hah! Do I detect a note of defiance? Foolish. Foolish,’ jeered Moriarty, shaking his long forefinger as if admonishing a child. ‘Do you think that just

because you have recovered your memory and some of your old occult powers, you can stand up to me? Have you forgotten the Great Stone of Power? Not even the combined strength of the College of the Occult Sciences, and all the Grand Masters, living and dead, could withstand its immense power. So how do you think you can stop me? It is beyond your capability to resist even an iota of its energy. Try!'

A ripple of movement flowed out of his eyes and, striking the stone, emerged as a kind of invisible wave of destructive energy that shot out towards Holmes and the two Lamas. Sherlock Holmes raised his hands and – as if he had been doing it all his life (which, in a manner of speaking, he probably had) – moved his fingers in a strange manner to form tantric gestures (Skt. *mudra*). Immediately, a barely visible barrier, a kind of curtain of shimmering energy, seemed to form before them. The force wave smashed into the psychic shield with the noise of a thunderclap. Holmes and the two Lamas were thrown to the ground; but they gradually rose to their feet, and it was apparent that, though shaken, they were happily unharmed. (244-45)

息を吹き返したホームズの目が光ると、かつて自らも学んだオカルトの教育研究機関などの技術の集積以上の凄腕を自負するモリアーティの目も光り、石を打ちつけると目に見えない破壊的な波動がホームズや2人のラマ僧に向けられる。すると、その破壊的な波動はホームズが指を動かして作り上げた「超自然的な盾」を突き破り、ホームズたちは地面に叩きつけられるものの無傷なまま立ち上がることができている。

ノルブはこのような超自然的な力の存在を『キム』に登場するラーガンに負っている。ノルブはラーガンが計算に長けていることを第2章の本文中で記述しているが、ノルブリンカへの侵入者モリアーティの魔力について描く際、『キム』に登場するラーガンについての略述を、自らの手による第3章の脚注において行なっている（198）。ラーガンがキムに魔術を見抜く力を試す場面の一部は以下の通りである。ラーガンはキムに水差しを渡すと、それを床に叩きつけ粉砕するよう命じる。ラーガンは粉々になった水差しを魔術で元通りになるかのようにキムに思い込ませるものの、その試みは無駄に終わるという場面だ。

'Look! Is it [water-jug] coming into shape?' asked Lurgan Sahib.

'But it *is* smashed – smashed,' he gasped – Lurgan Sahib had been muttering softly for the last half-minute. Kim wrenched his head aside. 'Look! *Dekho!*' It is there as it was there.'

'It is there as it was there', said Lurgan, watching Kim closely while the boy rubbed his neck. 'But you are the first of many who has ever seen it so.' He wiped his broad forehead.

'Was that more magic?' Kim asked suspiciously. (*Kim* 156, emphasis in original)

第４として、ノルブは自ら執筆した「序」や脚注において、チベット対中国を含む史実を取り込もうとする意図を明示している点がある。そもそもノルブは脚注や「序」において史実への言及に余念がない。例えば、インド北部レイとラサ間のキャラバンについての脚注において、『チベット・ジャーナル』に掲載されたジョン・ブレイによる実在の学術論文を示し、自らの記述に学術的客観性を持たせている（109）。

また、ノルブは『マンダラ』に登場するハリーのモデルとなった『キム』のハリーは実在したことを「序」にて示している。そこでは、『キム』に登場するベンガル出身とされるハリーの実在のモデルは、『キム』のハリーのようにイギリス側のスパイとして時に働き、チベット学の発展に尽力し、生涯の多くをダージリンで過ごし、王立協会会員でもあるがゆえにイギリスの著名人が彼への敬意を抱いていたことなどが盛り込まれている（XIII）。[7]

『マンダラ』の第１章などでもチベットと中国の対立は十分に触れられているが、「序」においてノルブが言及する対立は、「解放」の名のもとに行われた中国共産党軍によるチベット支配に由来する対立である。

> At the time, our country was occupied by Communist troops. They had invaded Tibet in 1950, and after defeating the small Tibetan army, had marched into Lhasa. Initially the Chinese had not been openly repressive and had only gradually implemented their brutal and extreme programmes to eradicate traditional society. The warlike Khampa and Amdowa tribesmen of Eastern Tibet staged violent uprisings that quickly spread throughout the country. The Chinese occupation army retaliated with savage reprisals in which tens of thousands of people were massacred, and many more thousands imprisoned or forced to flee their homes. (XI)

ここでは1950年に中国共産党軍によるチベット侵攻ならびに支配が始まり、チベットと中国による対立の激化が教科書的に指摘されている。エピローグにおいても同内容が再度記述されているばかりか（262）、文化大革命の折に頂点に達した中国によるチベットへの政治的圧力は、中国人をチベットに入植させる政策の結果、チベット人がマイノリティーとなってしまったこと、文化破壊はもとよりチベット人殺戮にまで及んでしまったことが新たに書き加えられている。

さらに、ノルブ自身の手による脚注の中でなされているアロー戦争への言及にも刮目すべきだ。

> In 1860 an Anglo-French expedition led by Lord Elgin occupied Peking after defeating Imperial Chinese forces and forcing the Emperor to flee to Jehol. Every palace, temple and mansion in the capital was thoroughly plundered, and the Imperial Summer Palace burned to the ground. The occasion that provoked this war was the 'Arrow' incident of 1856, when a Chinese-owned but Hong Kong-registered ship, the *Arrow*, was forcefully boarded by Chinese Police at Canton for the alleged purpose of searching out a notorious pirate. Incidentally, Elgin is buried

> in an old church yard at Dharamsala, the present headquarters of the Dalai Lama in northern India. (105, emphasis in original)

この言及が『キム』において高僧ラマとキムの追い求める「矢の川」の地口になっているのは、「矢（arrow）」に引用符が付されていることから明白だ。ノルブにはインド大反乱の前年に発生したアロー戦争（1856-60年）に言及する動機があるのではなかろうか。アロー戦争はイギリスが国家としての侮辱を受けたとして中国側に謝罪を要求するも、その要求を中国に跳ね返されたことが火種となり、その講和を実現させた天津条約や北京条約によってイギリスへの香港割譲が決定したことを考慮にいれれば、中国とイギリスの対立がここで浮き彫りになり、このことはイギリスが（すなわちホームズ）がチベット側に立つことの根拠となる。ゆえに、中国側が「ヨーロッパを、とりわけイギリス強烈に敵視した」というホームズに向けたハリーの発言からは、中国が持ち続けるチベットへの一貫した支配欲が垣間見えよう。

これらの変奏による示唆はとても意義深い。それは、３作家がそれぞれのテクストで設定した1890年代とは、前述したように、ロシアの南下政策を強く意識する当時のイギリスがチベットへの介入を行なっている時期であるからだ。繰り返すが、「最後の事件」にある1891年５月４日以降、シャーロック・ホームズとモリアーティは消息不明となる。続く1894年４月５日に設定された「空き家の冒険（The Empty House）」において見事な帰還を果たしたホームズは、消息不明期間（３年間）のうちの２年間、チベットに渡っていたことをワトソンに告げる。注意を促したいのは、ホームズのチベット訪問はやみくもな訪問ではなさそうだということだ。彼はイギリスへ戻ると、チベット訪問についての報告を外務省に行っている。すなわち、チベットとの関係強化を望んでいたイギリスがチベット侵略へと政策転換を行った時期にチベットへの訪問を果たしたホームズの行動は、彼が英国外務省の手先となっている可能性を十分に匂わせるものがある。

このような再読の可能性はキプリングの『キム』についても指摘できる。ヤングハズバンドが率いるイギリス軍による1904年のチベット侵攻は、イギリスによるインド占領の延長線上にある。イギリス帝国主義の代名詞のひとつとも言える英領インドに舞台設定がなされているため、英印関係ばかりが焦点化されてしまう『キム』は、チベットからラホールにやって来たテシュー・ラマを通してイギリスとチベットの関係を暗示している可能性が濃厚となり、その観点で再考することが今後の課題として私たちに求められることになろう。キプリングが知らないはずのないイギリス軍によるチベット侵攻を考慮すれば、『キム』を「グレイト・ゲーム」を題材にした英露関係や英印関係に加え、対チベット関係、対中関係をも視野にいれて考察することの必要性を指摘する他ない。すなわち、『キム』のパスティーシュとされる『マンダラ』は、チベットの存在を汲み取ることのできなかったこれまでの『キム』研究に対する批判とも取れるのだ。

６．おわりに

ジャムヤン・ノルブの『マンダラ』は、シャーロック・ホームズの「最後の事件」と「空き家の冒険」の２篇とラドヤード・キプリングの『キム』によって重層的に構築されたテ

クストと言える。「最後の事件」で描かれたホームズとモリアーティの対決が、チベット対中国（共産党）という構図に移し替えられ再演される。また、この戦闘は、巻物やチベットの権威を示すパワーストーンを目掛けて繰り広げられることから、『キム』における重要文書を狙うロシア人スパイ２名（といっても実際はロシア人とフランス人が１人ずつ）に対するキムやハリーが繰り広げる戦いの再演でもある。つまり、この『マンダラ』第３章における戦いは、ドイルの描いた対決とキプリングが描いた対決を重層的にアダプトすることで出来上がっている。

『キム』における「グレート・ゲーム」やイギリスとインドの関係性については何が言えるだろうか。サイードが指摘するように、1857年のインド大反乱がなければイギリスがインドを直接管轄下に置くこともなく、それと同時にキムとラマとの出会いもあり得なかったことになろう。だが、キプリングにとってそもそも英印対立は存在していないのだから、両国の緊張緩和なるものもありえないとも指摘している（*Culture and Imperialism* 308）。むしろ、キプリング自身がロシアに対する嫌悪をあからさまにしていることを踏まえれば、『キム』が描く対立とはイギリスとロシア（と共にフランス）との対立ということになる。ところが、この英露対立でさえ、一種のスパイ合戦こそ繰り広げられるが戦火を交えるような抗争には、少なくともテクスト上では発展していない。このように、『マンダラ』と照らして『キム』を考えてみると、一般に流布するキプリングのジンゴイスティックなイメージとはかけ離れた像が得られるのでなかろうか。

『マンダラ』に同時に織り込まれた史実や学術論文による現実性とファンタジー的要素とは並存しうるのだろうか。史実や学術論文に依拠し主張の正当性を主張するようなノルブの身振りを考慮すると、彼が特殊能力やオカルトの力をホームズ駆使させるというファンタジー的要素を『マンダラ』に盛り込む手法は、２人の作家作品を重層的に構築し完成させたテクストにしてはやや奇異ではなかろうか。そこにはダライ・ラマの中道路線への批判を包み隠さない「急進的分離独立派」とされるノルブの立ち位置が関係しているのかもしれない（ボイル　94）。たとえば、『西部戦線異常なし』のレマルクは砲弾が飛び交う戦場をリアリズム的に描いた。ノルブはこれとは正反対のアプローチをとり、ホームズとモリアーティとの戦いをオカルトの力を借りたファンタジー的な描写で処理したように映る。これは裏を返せば、オカルトやファンタジーによる激しい、物理的な戦火の交え方を現実世界でも実行すべきとするノルブの急進性の表れとれなくもない。それは、『中国とたたかったチベット人』でノルブが描くのは中国共産党軍に対するゲリラ戦を展開するチベット人であり、『ドラゴンの歯を買う』でノルブが詳述するのは中国製品の不買運動をすることの意義である。「急進的分離独立派」としてのノルブにとって、「戦い」とは軍事面および経済面で中国と衝突することなのかもしれない。[8]

ジャムヤン・ノルブの『マンダラ』を読み解くことで、ラドヤード・キプリングの『キム』やコナン・ドイルの「最後の事件」や「空き家の冒険」が持つチベットとの関係がより明瞭になったのではなかろうか。特に『キム』に関しては、チベット出身のテシュー・ラマの「矢の川」探しに同伴する少年キムは、厳密にはイングランド人ではなくアイルランド人である。このことは、『キム』を考察するには英印関係という軸だけを念頭においては不十分であることを意味しうる。『キム』は舞台とする英領インドの外側の世界、具体的にはイングランド、アイルランド、ロシア、チベットや中国への広がりを持ったテク

ストであることを新たに気づかせてくれるのが、『キム』のパスティーシュとしての『マンダラ』であることに興味を抱くのは筆者だけではなかろう。

1　本稿は2022年３月26日（土）にオンライン開催されたキプリング協会全国大会第22回のシンポジウム「Adapting Kipling / Adapted Kipling」での口頭発表での原稿を大幅に加筆、修正したものである。大会中に貴重なコメントを下さった方々、特に伊勢芳夫大阪大学教授には記して感謝したい。

2　2022年２月25日、ツェワン・ノルブがラサのポタラ宮前で焼身自殺をもって中国への抗議の意思を表明した。Eckert を参照のこと。

3　その出版の翌年、『マンダラ』は Hutch Crossword Book Award を受賞した。

4　医者から作家に転身したことでも知られる、エジンバラ生まれのアーサー・コナン・ドイルは、相棒のワトソンと犯罪のトリックを次々と明かしていく短編推理小説シリーズを主に「ストランド」誌で連載した。それら一連の短編推理小説は好評を博し、『緋色の研究』（*A Study in Scarlet,* 1887）や『シャーロック・ホームズの冒険』（*The Adventures of Sherlock Holmes*, 1892）、『シャーロック・ホームズの思い出』、『シャーロック・ホームズの帰還』などにまとめられた。19世紀末に勃発した南アフリカ戦争に向けられた政治的意見を公表したり、神秘主義に傾倒していったりもした。ラドヤード・キプリングはイギリス初のノーベル文学賞受賞作家である。ボンベイ生まれ、イギリスで教育を受けた、いわゆるアングロ・インディアン作家であるキプリングは、青年期にはインドへ戻りジャーナリストとして勤務する傍ら短編小説や詩を発表していった。キプリングの短編はモーパッサンと並び賞される。再度イギリスへ戻ると作家としての名声を得た。彼に愛国主義や帝国主義擁護を認める動きもある他方、そのような動向を安易な認識と批判する動きもある。主要テクストに『ジャングル・ブック』（*The Jungle Book*, 1894）や本論で扱う『キム』があげられる。

5　『マンダラ』についての先行研究はほぼ皆無といえる状況の中、ヴェンチュリノの論考は、チベット文学をポストコロニアリズムやポストモダニズムの観点で考察することの必要性を訴えており、『マンダラ』も当然その中のテクストであると論じる。とりわけ『マンダラ』に関しては、「現実」と「虚構」を織り交ぜるノルブの手法が彼の訴える中国打倒には有効な手立てとして機能していると論じ、本考察における一つの足場にもなっている。また、チベット文学やチベット史の理解のためには、中国や西側諸国のテクストが代補となりうることをも議論している。さらに、チベット文学研究が積極的に進められてこなかった要因として、チベット文学テクストそのものの絶対数が限定的であること、文学研究制度全体がチベット文学を取り扱わないことに加えて、中国による政治的介入のためにチベット文学研究そのものが抑止されてしまうことをつけ加えている。シェリー・ボイルによる論考は、チベットの生活習慣やチベット史をベースに『マンダラ』を読み解く作業となっている。

6　ここで示すチベット史はゴールドスタインの研究を参考にした（1-60）。

7　ハリーについては、ピーター・ホップカークが詳細に記述している（223-26）。

8　ノルブのそのような政治的主張の良し悪しを判断することは本稿の目的を逸脱するの

で差し控えるにせよ、本論稿を手がけている最中にも『キム』の背景とされる「グレイト・ゲーム」とどこか酷似した戦が東欧付近で勃発してしまった。20世紀以降の英文学テクストを研究する筆者は研究対象となるテクストを今現在読み研究すること、つまりは文学研究におけるアクチュアリティに意識的であると思ってはいるが、本論稿はそのアクチュアリティを否応なく熟考する機会となった。

【参考文献】

Bhoil, Shelly. “De/Re/Mystification of Tibet in *The Mandala of Sherlock Holmes.*” *South Asian Reviews*. 34.2 (2013): 91-109.

Bradshaw, David. “Kipling and War.” Ed. Booth, Howard J. *The Cambridge Companion to Rudyard Kipling*. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 80-94.

Brantlinger, Patrick. “*Kim.*” Ed. Booth, Howard J. *The Cambridge Companion to Rudyard Kipling*. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 126-40.

Bray, John. “The Lapchak Mission from Ladakh to Lhasa in British Indian Foreign Policy.” *The Tibet Journal.* 15.4 (1990): 75-96.

Bristow, Joseph. *Empire Boys: Adventures in a Man's World*. London: Harper Collins Academic, 1991.

Doyle, Conan. “The Empty House.” *The Return of Sherlock Holmes*. 1905. *The Complete Stories of Sherlock Holmes*. Hertfordshire: Wordsworth Editions, 2006. 849-65.

---. “The Final Problem.” *The Memoirs of Sherlock Holmes*. 1894. *The Complete Stories of Sherlock Holmes*. Hertfordshire: Wordsworth Editions, 2006. 830-46.

Eckert, Paul. “Potala Palace Self-Immolation Protesters Identified as Popular Tibetan Singer”. <https://www.rfa.org/english/news/tibet/potala-immolation-03042022175112.html> 2022年３月４日閲覧.

Goldstein, Melvyn C. *The Snow Lion and the Dragon: China, Tibet and the Dalai Lama*. Berkeley, CA: U of California P, 1997.

Hopkins, Peter. *Quest for Kim: In Search of Kipling's Great Game*. Oxford: Oxford UP, 1997.

Kipling, Rudyard. *Kim*. 1901. London: Penguin, 2011.［ラドヤード・キプリング『キム』木村政則訳，光文社，2020年.］

Laird, Thomas. *The Story of Tibet: Conversation with Dalai Lama*. New York: Grove P, 2006.

McBratney, John. “India and Empire.” Ed. Booth, Howard J. *The Cambridge Companion to Rudyard Kipling*. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 23-36.

Norbu, Jamyang. *Buying the Dragon's Teeth*. New York: High Asia P, 2004.

---. *Horseman in the Snow*. Dharamsala: Information Office, Central Tibetan Secretariat, 1986.［ジャムヤン・ノルブ『中国とたったかったチベット人』ペマ・ギャルポ，三浦順子訳，日中出版，1987年.］

---. *Shadow Tibet: Selected Writings 1989 to 2004*. 2004. New Delhi: Srishti Publishers, 2006.

---. *The Mandala of Sherlock Holmes: The Adventure of the Great Detective in Tibet*. Uttar Predash: Harper Collins India, 1999.［ジャムヤン・ノルブ『シャーロック・ホームズの失われた冒険』東山あかね，熊谷彰訳，河出書房新社，2004年.］

Said Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1993.

Stewart, Gordon T. *Journeys to Empire: Enlightenment, Imperialism and the British Encounter with Tibet, 1774-1904*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.

Venturino, Steven J. "Placing Tibetan Fiction in a World of Literary Studies: Jamyang Norbu's *The Mandala of Sherlock Holmes.*" Eds. Hartley, Lauran R and Patricia Schiaffini-Vedani. *Modern Tibetan Literature and Social Change.* Durham: Duke University P, 2008. 301-26.

Received : April, 30, 2022
Accepted : June, 8, 2022